

2018年11月9日放送

大竹まことゴールデンラジオ（ラジオ文化放送）より

（この放送をお聞きになりたい方は、<https://www.youtube.com/watch?v=p6AxNLTuBOw&t=3540s>

大竹まことの朗読で49分45秒くらいから始まります。）

日々黄金の歴史あり、『ゴールデン・ヒストリー』

今週は「国と国とのあいだで」というテーマでお送りしています。

少数民族クルド人の男性、アリ・アイ・ユルデスさん43歳。25年前、戦争からのがれ日本へやって来ました。

しかし今も難民とは認められず、仕事をするさえ許されていません。

アリさんは1975年トルコで生まれます。7人兄弟の4番目。父も親戚も皆羊飼いでした。アリさんは幼い頃から父の背中を追い、放牧の仕事を手伝います。

当時トルコでは、少数民族への弾圧が年々厳しくなっていました。クルド語の教育は禁じられ、民族衣装を自由に着ることもできません。

それに反発した一部のクルド人とトルコ政府が衝突、内戦が始まります。

するとトルコは、一般のクルド人を強制的に徴兵し、同胞同士で戦わせようとしたのです。

「私も私の家族もクルド人同士で戦いたくはありませんでした。だから両親は日本にいる親戚に頼んで、私を逃がしてくれたんです。」

1993年春、17歳のアリさんは一人で日本にやってきます。親戚の家で暮らし始めますが、言葉も何も分からず不安に押しつぶされそうになります。それでもなんとか仕事をさがし、働き始めました。

「難民申請の精度を知ったのは来日の2年後、当時は支援してくれる人も情報を手に入れる術もなかったのです。難民申請は入国から60日以内に出すっていうルールがあることをその時初めて知ったんです。でも、もう2年も経っていて、自分ではどうしようもありませんでした。」

1998年、22歳のアリさんは不法残留の疑いで茨城県牛久の入国管理センターに収容されます。

「イラン、中国、フィリピン、インド、収容所には様々な事情を抱えた様々な国の人達がありました。寝起きをするのは一人あたり二畳ほどのスペースしかない大部屋。出入り口には鍵がかけられ、自由な時間はほとんどなく、常に誰かに監視されていました。

体調が悪くなっても医者が診察に来るまで、1ヶ月以上も待たされることがあります。やっと診察の順番が回ってきて医者の前に座ったら、横にいた係官から「すぐ出て行け」って追い出されました。そんな嫌がらせを毎日毎日受けるんです。

彼らはいつも威圧的でいくら説明しても私たちがここに居る事情を理解しようとしませんでした。」

アリさんは一度解放されますが、その後再び収容、2005年までの間にのべ4年3ヶ月、収容所での過酷な生活を強いられました。

現在アリさんは日本の女性と結婚し、千葉県で暮らしています。

子供は、いません。今も仕事をすることは許されず、日本に永住する権利もないままです。

「将来の夢は・・・・・・・・、無いです。だって、明日どうなるか分からないから。突然捕まえられて、強制送還されるかも知れない。トルコに戻れば、私は牢屋行きです。だから毎日が怖い。

夢なんて・・・・・・・・持てないです。」

幼い頃、ふるさとの草原で父とともに羊を追っていたアリさん。日本は今も彼を難民と認めていません。